

Ⅲ 沖ノ島 18 号遺跡出土八鳳鏡（変形夔鳳鏡）と関連資料の検討

辻田 淳一郎 九州大学

要旨：本稿では、「伝沖ノ島出土返納品」のうち鏡片 1 点について、従来知られている関連資料との関係やその意義について検討を行った。この結果、返納鏡片・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片（鈴木基親氏旧蔵）は、いずれも18号遺跡出土の同一個体で本来一面分の可能性が高いこと、当該復元鏡は、広島県尾ノ上古墳出土鏡の同型技法による同一文様鏡と想定されること、またこの復元鏡は、17号遺跡出土八鳳鏡（変形夔鳳鏡）とは、ほぼ同大・同一型式ではあるものの、同範・同型関係にはないこと、復元鏡が尾ノ上古墳出土鏡と同一文様鏡であることから、17号遺跡および18号遺跡から出土した八鳳鏡は、古墳時代前期に列島に流入したものであり、近畿中枢と西晋王朝との交渉の結果もたらされた鏡である可能性が高いことなどを明らかにした。

キーワード：沖ノ島返納品、沖ノ島18号遺跡、八鳳鏡（変形夔鳳鏡）、広島県尾ノ上古墳、三国～西晋代

1. はじめに

本稿の課題は、返納品のうち鏡関連資料について報告し、従来知られている資料との関係やその意義について検討することである。具体的に該当するのは、鏡片 1 点である（図 1 下）。本資料は、沖ノ島 17号遺跡から出土している八鳳鏡（変形夔鳳鏡：図 2）と文様が共通した資料であり、従来から知られている「伝宮地嶽付近出土」とされる鈴木基親氏旧蔵の鏡片 3 点（図 1 左上）と、18号遺跡出土鏡片 5 点（図 1 右上）の関連資料であるとみられることから、破片相互の関係や17号遺跡出土鏡との同範・同型関係の有無の解明などが課題として挙げられる。あわせて、類例として存在する広島県尾ノ上古墳出土鏡がこれらの破片資料の位置づけを考えるうえで重要な資料であることを確認したことから、この点をふまえて返納品の位置づけについて検討を行う。

2. 関連資料をめぐる先行研究と問題の所在

（1）1970 年代以前の研究動向

返納品を含めた破片資料そのものの検討を行う前に、沖ノ島17号遺跡出土八鳳鏡と関連資料に関する先行研究について整理しておきたい。

17号遺跡出土八鳳鏡は、21面出土した17号遺跡出

土鏡群の中では、三角縁神獸鏡以外ではもう 1 面の魏晋鏡（変形素文方格鏡：17-20）とともに、数少ない中国鏡と考えられている資料である（図 2）。ただし本鏡は、17号遺跡の報告時点では「変形夔鳳鏡」と呼称され、文様の「平面磨り出し」を行っていないこと、縁が三角縁であること、鋸歯文が外区に存在することの 3 点から「仿製鏡」として位置づけられている（原田1961）。またこの資料に関連して、鈴木基親氏が所蔵していた「福岡県の宮地嶽の近在から見出された」とされる鈴木基親氏所蔵の八鳳鏡片 3 点について梅原末治氏が報告を行っており、この中で梅原氏は六朝代の舶載品の可能性を指摘している（梅原1966）。その後、沖ノ島の第 3 次調査に伴い新たに18号遺跡から出土した破片が上記 17号遺跡出土鏡と類似することから、岡崎敬氏はこれらの破片が17号遺跡出土鏡と「同範関係」にある可能性を想定した。あわせて、上記の伝宮地嶽付近出土鏡片についても、「所伝のように宮地嶽近在のものとするか、あるいは沖ノ島18号遺跡の夔鳳文鏡のかたわれとするか決定することはできないが、後者の場合の可能性もつよくのこされている」と指摘している。また氏は中国の西晋墓出土鏡に類例を見出しつつ、17・18号遺跡出土の当該八鳳鏡も西晋代の作と内区に踏返してつくった仿製鏡と考えることができる」とした（岡崎1979：pp.307-308）。樋口

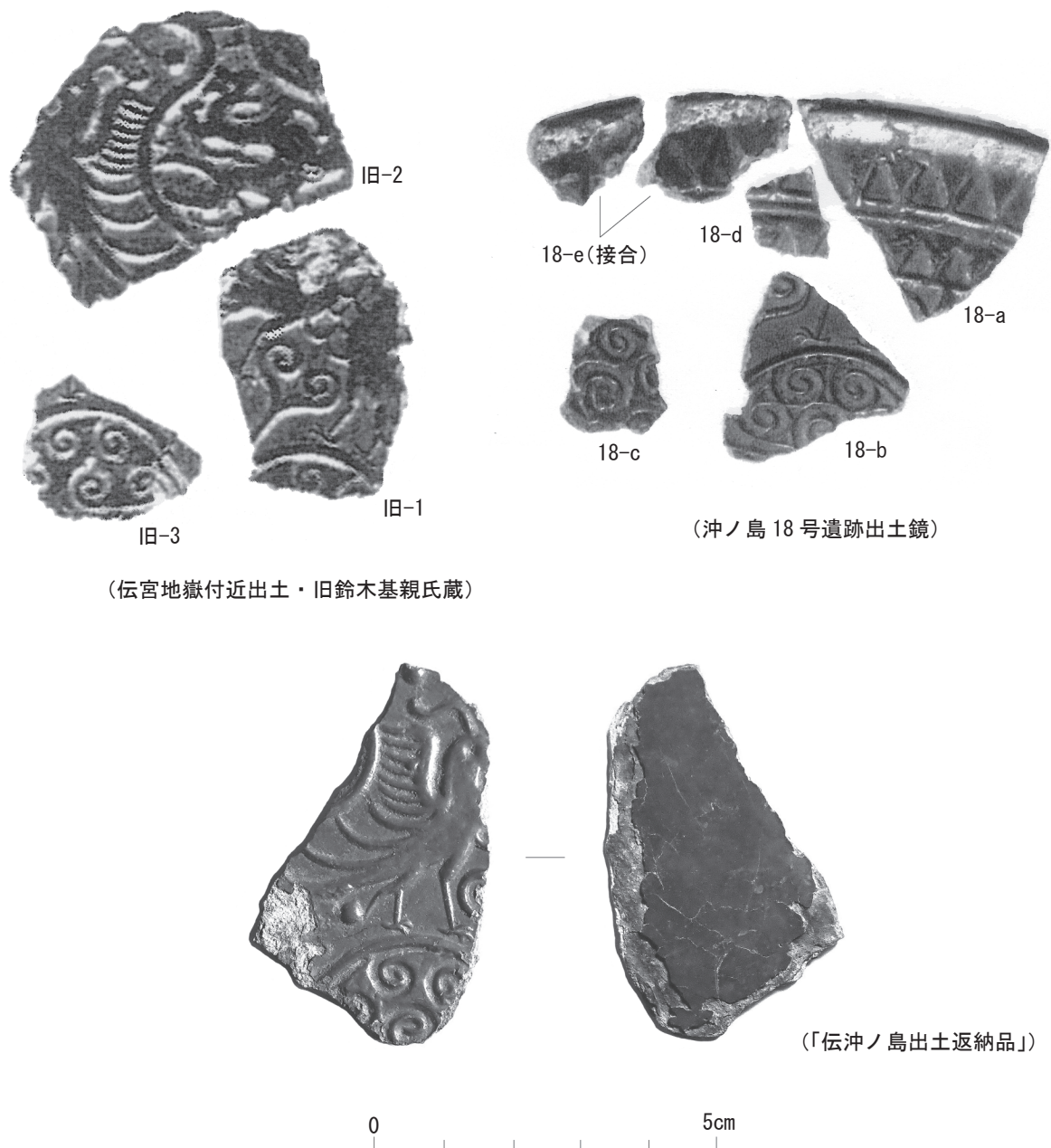


図1 返納鏡片と関連資料（ほぼ実大）

隆康氏も『古鏡』において、「沖ノ島鏡は、縁に二重の鋸歯文帯をつけ、便化が著しい。鏡体や銅質からみて、仿製鏡であろう」と想定している（樋口1979）。このように、第3次調査報告書刊行前後の時点では、これらの資料が同範関係などの近しい関係にあることが想定されていたこと、「仿製鏡」と「六朝代の舶載品」の双方の可能性が指摘されつつ、「仿製鏡」とする理解が有力視されていたことがわかる。

（2）1990年代以降の研究動向と課題

その後、当該八鳳鏡については、後述するように岡内三眞氏（1996）や岡村秀典氏（1996）が中国の出土資料を元に呉から西晋代の中国鏡と位置づけ、また秋山進午氏（1998）が沖ノ島出土鏡・伝宮地嶽付近出土鏡片の両者を西晋代よりも時期が下る東晋代の資料と位置つけたことなどを通じて、現在は中国鏡としての位置づけがほぼ定着している（例：車崎編2002；重住他2010）。製作年代については三国代・

西晋代・東晋代のいずれの時期とみるかで意見が分かれており、これについては後ほどあらためて検討したい。

前述の17号遺跡出土鏡・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片の相互の関係について、その背景まで含めてまとまった形で検討したのが花田勝広氏の論考（1999）である。花田氏は、18号遺跡出土鏡片5点と伝宮地嶽付近出土鏡片3点について、復元案を提示しつつ本来同一個体であった可能性を指摘する（後述するように、氏の復元案では18号遺跡出土鏡片と伝宮地嶽付近出土鏡片の一部が接合することが示されている）。かつ、前述の岡崎氏の指摘を受けて、これらの同一個体と認定した鏡片が17号遺跡出土八鳳鏡と同範関係にあるものと推定する。また伝宮地嶽付近とされる所伝をもとに宗像地域の古墳築造動向を検討した結果、これらが出土したと想定可能な古墳が見いだせないことから、これらの破片はすべて沖ノ島から出土したものであるものと推測している（花田1999）。後述するように、花田氏の復元案にはいくつか修正すべき点が含まれているが、これらの鏡片が同一個体であり、かつすべて沖ノ島から出土した可能性を明確に指摘した点で重要である。

その後、重住真貴子・水野敏典・森下章司氏らにより沖ノ島遺跡出土鏡全資料の三次元計測とその報告が行われている（重住他2010）。この中で上記の八鳳鏡と関連資料についても検討が行われ、その結果として、上述の岡崎氏・花田氏が想定したような、17号遺跡出土鏡と18号遺跡出土鏡片との間での同範・同型関係については、その根拠が確認できなかったことが示されている。この結果、両者について同範・同型関係を前提とすることなく、相互の関係を検証することが必要となっている。

以上の先行研究をふまえた課題としては、大きく以下の4点が挙げられる：①17号遺跡出土鏡と18号遺跡出土鏡片は同範・同型か、②18号遺跡出土鏡片と伝宮地嶽出土鏡片は同一個体か、③返納品の鏡片はどのように位置づけられるか、④その上で、これらの資料は沖ノ島出土鏡群全体の中でどのように位置づけられるか。本稿で対象とする返納品の鏡片

は、上記の先行研究で扱われた鏡群の関連資料とみられることから、その相互の関係を明らかにすることが必要である。

他方で、18号遺跡出土鏡片や伝宮地嶽付近出土鏡片は破片資料であるため、本来同一個体であるかどうか、また欠損部を含めて考えたときに、17号遺跡出土八鳳鏡と同範・同型関係にあるかの検証については資料的な限界があった。この点について、類例として知られる広島県福山市尾ノ上古墳出土鏡の観察を行った結果、尾ノ上古墳出土鏡を介することにより、上記の問題の解決を図ることが可能であることが判明した。以下、この点について具体的に検討したい。なお本稿では、沖ノ島出土鏡の番号について、宗像大社の整理番号（重住他2010）にもとづいて記述する。

3. 返納鏡片・関連資料による八鳳鏡の復元

（1）沖ノ島17号遺跡出土鏡と尾ノ上古墳出土鏡の文様構成

ここでまず、沖ノ島17号遺跡出土鏡（以下「17-1鏡」）の文様構成について、前述の重住氏らの報告を引用する：「17-1 変形夔鳳鏡 22.1cm 785g 外区は縁が小さな斜縁状で、二帯の内向鋸歯文。続けて雲文と鳥文を2体ずつ交互に配した連弧文がめぐる。内区は宝珠形の四葉によって4つに区画され、四葉の中に横向きと振り返りの龍を置き、四葉の間には相向う夔鳳を置く。それぞれの夔鳳の頭上には「富」「冝」「子」「孫」の吉祥銘を入れる。鈕は円形鈕孔で平たい。鏡背面は全体的に模糊としていて、内区の一部はうまく文様表出されず「孫」の字が消えている。縁の2箇所が凹み、縁から鈕への長い亀裂がある。なお、18号遺跡に文様や特徴が酷似する鏡片5点がある」（重住他2010：p.22）。

あわせて、18号遺跡出土鏡片5点の記述も同様に引用する：「18-5-3 変形夔鳳鏡片 5点 22cm（推定復元径）17号遺跡の変形夔鳳鏡（17-1）と酷似する夔鳳鏡の破片。同範・同型の根拠は得られず。半円文の表出が2片間で異なる。伝宮地嶽付近の古墳出土の破片（鈴木基親氏旧蔵、鈴木氏売却にて現在

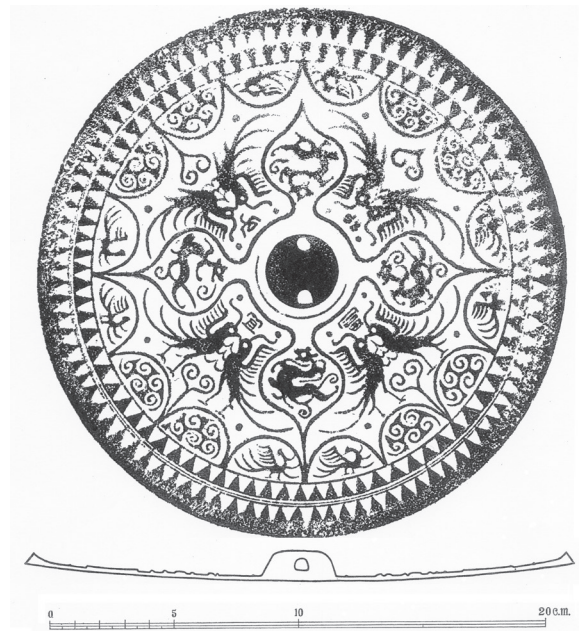
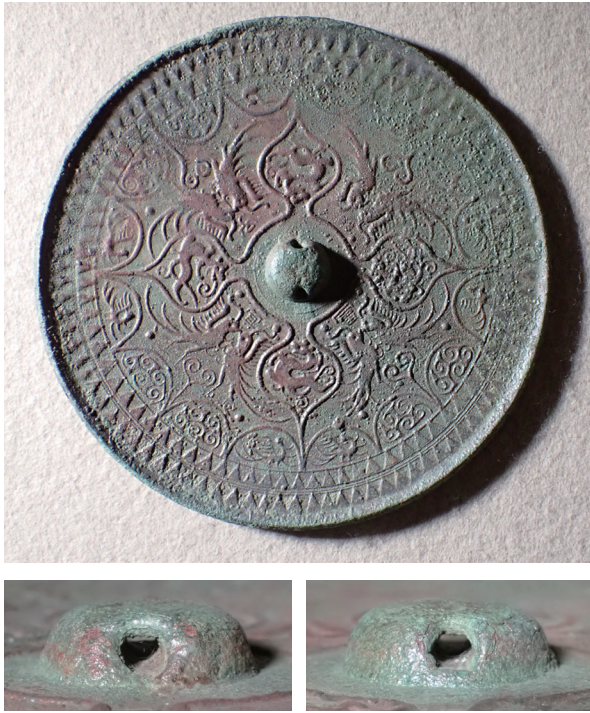


図2 沖ノ島17号遺跡出土八鳳鏡（17-1鏡：面径22.1cm，縮尺任意）

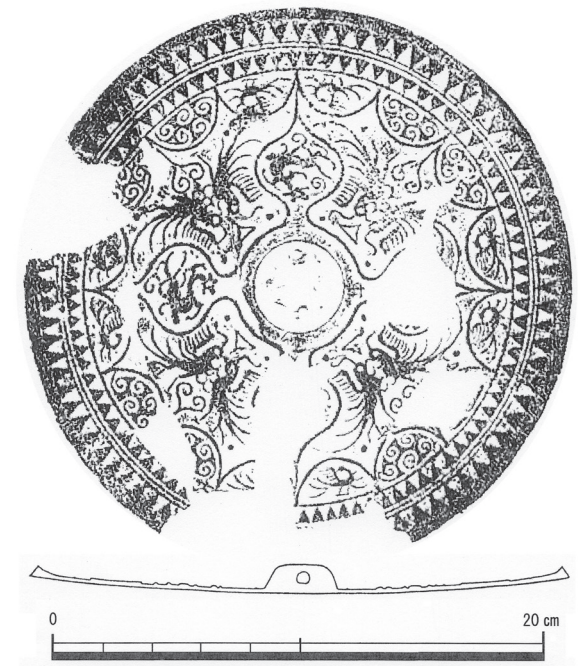


図3 広島県尾ノ上古墳出土鏡（面径22.0cm，縮尺任意）

所在不明 梅原1966)と同一個体とみる考えもある」(重住他2010 : p.26)。最後の部分では、前掲の岡崎敬氏(1979)および花田勝広氏(1999)らの論考の該当箇所が参照されている。

最初に問題となるのは、上記の重住氏らも取り上げているように、17-1鏡と18号遺跡出土鏡片5点および伝宮地嶽付近出土鏡片3点が同範・同型技法などによる同一文様鏡と認定できるかどうかである。本稿では、図1に示すように、18号遺跡出土鏡片5点は、「18-a」～「18-e」、伝宮地嶽付近出土鏡片3点(鈴木基親氏旧蔵鏡)は、「旧-1」～「旧-3」と呼称する。以下では、冒頭に掲げた返納品の鏡片1点(以下、「返納鏡片」と呼称)も含めた、計9点の破片の相互の関係について検討したい。

返納鏡片は、残存長約5cm×最大幅約4.3cmの内区片である。向かい合う鳳文のうちの左側の破片であることがわかる(図1下)。

花田氏(1999)の復元案では、1979年の報告書の復元をふまえつつ、①個人蔵の鈕、②鈴木氏旧蔵品、③沖ノ島3次調査(18号遺跡出土鏡)をあわせて検討が行われている。その結果、いくつかの破片が接合する可能性が示されており、後述するように、このうち旧-2と18-bの接合箇所については、筆者もその可能性が高いものと追認している。それ以外については、例えば氏が図示する旧-1は、写真と左右逆の形で復元・配置されているなど、いくつか修正を要する点がある。また上記①の個人蔵の鈕は、後に神宝館に寄贈された「伝7-2」に該当するが、これについては「仿製盤龍鏡」の可能性などが想定されており(重住他2010)、鈕の周囲の突線などがみられず鈕の形態自体も17-1鏡と異なることから、ここでも当該の八鳳鏡とは別個体として扱っておきたい。

返納鏡片は、これらのいずれとも接合する関係にはないことから、鏡片のみからではこれ以上の検討は難しい。そこで重要となるのが、今回検討する広島県福山市尾ノ上古墳出土鏡である(図3、以下「尾ノ上鏡」)。本鏡は、1999年に真砂土の採取に伴い緊急調査された全長約60mの前方後円墳から出土した鏡で、すでに盗掘を受けていたこともあり、一部欠

損しているが、面径22.0cmで17-1鏡とほぼ同じ大きさである(福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団2000)。本鏡は、車崎正彦氏が『考古資料大観』において17-1鏡の関連資料として例示している(車崎編2002 : 102-1)。

文様構成について観察すると、17-1鏡と尾ノ上鏡は、共通性が高い一方で、異なる点がいくつか見受けられる。具体的には、①宝珠形の四葉座の中の龍像の向き、②鳳文の間の銘／文様の両者である。①については、17-1鏡では胴体がいずれも「左向き」で、左向き頭部の龍像と、右に振り返って口から渦文を出す龍像が交互に配されている。逆に尾ノ上鏡では、胴体がいずれも「右向き」で、胴体と同じ向きの頭部と振り返る頭部(＋渦文)の龍像の配置が交互である点は共通する。②の鳳文の間の銘／文様については、前述のように17-1鏡では一対の鳳文の頭上に「富」「亘」「子」「孫」の吉祥銘が配されるのに対し、尾ノ上鏡では逆三角形文とその下端から下方に延びた線が向き合った鳳文の頭部の間に続く形で描かれている。逆にそれ以外の特徴については細部に至るまで共通性が高い点が注目される。以上の①②の特徴から、17-1鏡と尾ノ上鏡は、ほぼ同大・同一型式でありながら、同範・同型技法などによる同一文様鏡ではなく、「別の文様の鏡」であるということがわかる。あわせてこの両者は、同一工房なり極めて近い関係の中で製作された連作鏡群などの可能性も想定される資料と考えることができる。

その上で問題となるのは、今回対象としている返納鏡片や18号遺跡出土鏡片5点・伝宮地嶽付近出土鏡片3点などが、17-1鏡と尾ノ上鏡のどちらとより関連がつよいかという点である。結論からいえば、これらの鏡片はいずれも尾ノ上鏡との共通性が高く、かつ同型技法による同一文様鏡の可能性が高いと考えられる。次項にてその論拠を述べる。

(2) 破片資料の復元と関連資料相互の関係

返納鏡片・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片3点について、文様の細部を尾ノ上鏡と比較したところ、一部の破片を除くと、大半の破片が尾ノ上鏡の特定位置と微細な特徴まで含めて共通する

ことが判明した。各破片の想定位置を尾ノ上鏡の拓本上に配置したものが図5である。

文様の位置については、17-1鏡の文様構成（図2）をもとに、宝珠形の四葉座を基準として、上から時計回りに宝珠形1～4とする。内区の周囲に配された16個の連弧文（半円形）についても、上から時計回りに1～16とする。向き合う一対の鳳文については、右上・右下・左下・左上の区画ごとに、それぞれの左右の鳳文について検討した。

このうち、まず返納鏡片について観察すると、一対の鳳文の左側であることがわかるが、この背中に伸びた羽の中に、文様とは無関係な「点」が観察できる（図4左）。尾ノ上鏡を観察すると、左上区画の一対の鳳文のうち、左側の鳳文の同じ位置に「点」が確認できる（図4右）。この「点」は、古墳時代中・後期の同型鏡群などで広く観察される、いわゆる「共有傷」とみられ、両者が同型技法による同一文様鏡である可能性を示唆するものである。あわせて、尾ノ上鏡では、鳳文の左側の足付近から後方に伸びる尾の付近に珠文があり、その左側から半円形にかけての部分が崩れているが、返納鏡片にも同様の傷が認められる。また鳳文の下に位置する半円形内の渦文の細部も、尾ノ上鏡の半円形15と一致する。以上から、返納鏡片と尾ノ上鏡の両者は、同型技法による同一文様鏡である可能性が高いことが判明した。この認識を定点として、他の破片についても検討したところ、以下の観察結果が得られた。

・「左上」区画と宝珠形4：〔返納鏡片・18-b・旧-2〕。18-bは、半円形内の渦文が突線状に表現されている点の特徴である。この破片は、重住氏らの報告の中で、「半円文の表出が2片間で異なる」と注目された資料であるが（重住他2010：p.26）、尾ノ上鏡を観察すると、16ある半円形の中で、半円形14のみ渦文が突線状に表現されており、18-bと細部まで一致する。また旧-2は、右側の鳳文と宝珠形が描かれており、鳳文の頭部上に逆三角形文の左上角の一部が僅かに残存している（写真による復元ではやや小さくなっており、拓本とは若干ずれている）。また宝珠形内の龍像の胴体が右向きで、頭部も振り返らない右向きで表現されており、かつ鳳文

の両足が18-bの半円形上にある足先表現と接合する位置で確認できる。以上から、返納品・18-b・旧-2の3点は、尾ノ上鏡でいえば左上の鳳文から宝珠形4にかけての位置にあたる、尾ノ上鏡と同一文様鏡の一部と考えることができる。このうち、18-bと旧-2の接合関係については花田氏が先の復元案で示しており、本稿では尾ノ上鏡をもとにその点を追認したものといえる。

・「左下」区画：旧-1・旧-3の2点が該当する。花田氏による図上の復元では、前述のように旧-1を図示する際に左右が逆転しているが、写真をもとに検討したところ、旧-1と旧-3はほぼ接合する位置関係にあり、かつ半円形内の渦文や向かい合う鳳文の足先などの細部の特徴が一致したことから、尾ノ上鏡の同一文様鏡の左下の区画・半円形11に相当する位置の破片である可能性が高い。

・「右下」区画・半円形6付近：厳密には位置を確定できないが、18-aと18-cの2点が該当するものと推定した。18-aは外区の二条の内向鋸歯文と隣り合う連弧文（半円形）が接続する下端の部分が残存している。二条の内向鋸歯文のそれぞれの位置関係について、尾ノ上鏡の残存箇所すべてを確認したところ、鋸歯文の大きさおよび内側と外側の鋸歯文が相互に対応する位置関係にあることなどから、現在残存している範囲の中では、半円形6の外側の位置の可能性が高いと判断される。18-cについては、半円形内の渦文の位置・向き・大きさなどの細部で、現在尾ノ上鏡で残存している半円形で一致する箇所が見出されず、かつ文様構成からは18-aに隣接する位置に復元できることから、尾ノ上鏡では欠損している半円形6の一部であるものと想定した。なお今回の報告に際し、18-aと18-cの両者が接合するかどうかの検証を試みたが、18-cの破断面が欠けていることから直接の接合関係は確認できなかった。このため、18-cについては厳密には位置を特定できず、半円形6以外の欠損箇所に該当する可能性も想定しておく必要がある。

この他、18号遺跡出土鏡片5点のうち、18-d・eについては鋸歯文の特徴のみでは位置を限定できなかったため、ここでの図示は割愛したが、銅質・鋳

上がり・鋸歯文の大きさなどからみて、上記の鏡と同一個体である可能性が高い。

以上の検討により、18号遺跡出土鏡片3点と鈴木基親氏旧蔵鏡片3点は尾ノ上古墳出土鏡の同一文様鏡の同一個体の一部で、〔旧-2・18-b〕・〔旧-1・旧-2〕で接合関係が確認できた（18-a・18-cについては未確定）。また返納鏡片についても、尾ノ上鏡との共有傷の存在から、上記の同一文様鏡の一部であることが判明した。この結果、これらの破片はすべて同一個体で、かつ本来は18号遺跡から出土したものであることが確定でき、かつ本鏡は17-1鏡とは同範・同型の関係にはない（文様が異なる別個体）ことが明らかとなった。18号遺跡出土鏡片と伝宮地嶽付近出土鏡片の間での接合関係（旧-2・18-b）はすでに花田氏によって指摘されていたものであり、この点で両者がすべて18号遺跡から出土した可能性が高いとする花田氏の理解を追認した。その上で、花田氏の復元案を一部修正しつつ、本鏡が17-1鏡と同範・同型の鏡ではなく、別に尾ノ上鏡の同一文様鏡が存在しており、返納鏡片も含めてその一部であることを新たな復元案とともに示した、というのが上記の観察の成果である。

一点付言するならば、この復元は、これら9(7)点の破片が同一個体である可能性と、尾ノ上鏡の同型技法による同一文様鏡が現状で「1面」と想定した場合のものである。同一文様鏡が本来複数面存在した場合はこのかぎりではないが、銅質や鋳上がりなどでみるかぎり、これらの破片は同一個体の可能性が高いと判断されることから、1面分の同一文様鏡として復元した。現状で破片の推定位置が重複していないことも消極的ながら判断材料となろう。

4. 18号遺跡出土八鳳鏡（変形夔鳳鏡）の年代的位置づけ

最後に、上記の復元案をもとに、尾ノ上鏡の同一文様鏡1面が沖ノ島18号遺跡から出土した、と考えた場合の、本鏡の沖ノ島遺跡出土鏡群全体における位置づけについて検討しておきたい。以下では、上記の破片資料を18号遺跡出土八鳳鏡〔18-5-3鏡〕と

して記述する。

上述のように、17-1鏡と18-5-3鏡については、現在は三国代以降の中国鏡とする見解が有力である。1990年代以降の主な見解として、以下のような諸研究が挙げられる。岡内三眞氏は、鈕座と文様の組み合わせにもとづき、宝珠形の鈕座をもつものをⅣ式と分類する。Ⅳ式鏡は「三国時代初めに生産が始まり、西晋の半ば・4世紀を待たずに生産が衰えてしまい、およそ60-70年の生産期間であったと想定される」とした上で、沖ノ島鏡を含む「Ⅳ B2b ロ式」鏡は西晋代の作と位置づけている（岡内1996：p. 307）。岡村秀典氏は、後述する関連資料の西晋墓出土事例から、いずれも西晋代の作と想定している（岡村1996）。他方、秋山進午氏は、後漢代以降の八鳳鏡を検討する中で、宝珠形の鈕座を持つ一群を岡内氏と同様に4式とし、外区平素縁のものを4A式、外区有文縁のものを4B式、全体的に線・立体表現図形の文様のものを4C式と分類する。沖ノ島の資料は氏の4C式に該当する。氏は、4A式を呉中期から西晋にかけて、4B式を呉代後半から西晋およびそれ以降、4C式は「線表現の表出や内行花文が規格をはずれ、周縁に鋸歯文帯が入るなど、夔鳳鏡の範疇からかなり外れる。その年代は南朝にまで引き下げる必要がある」とした（秋山1998：p. 14）。

それ以降では、車崎正彦氏が呉以降の「三国鏡」として17-1鏡・尾ノ上鏡や仏像夔鳳鏡の事例を挙げている（車崎編2002）。車崎氏は、三国時代の呉鏡・魏鏡・西晋鏡をまとめて「三国鏡」と総称している。これらの宝珠形の四葉座を持つ一群は、仏像夔鳳鏡も含めて呉の鏡と捉えられている（王1998）。また17-1鏡や18-5-3鏡について、重住真貴子氏・水野敏典氏・森下章司氏らは「三国鏡」と位置づける（重住他2010）。下垣仁志氏は「三国～」（三国代以降）、岩本崇氏は「西晋鏡（280～300年ごろ）」として位置づけている（下垣2018；岩本2023）。筆者も上記の先行研究などをもとに、呉系の三国代以降の鏡として位置づけている（辻田2007・2025）。

17-1鏡や18-5-3鏡は、中国に直接の類例がないため、実年代についても上記のように意見が分かれて



図4 返納鏡片と尾ノ上鏡の「左上」区画付近（縮尺任意）

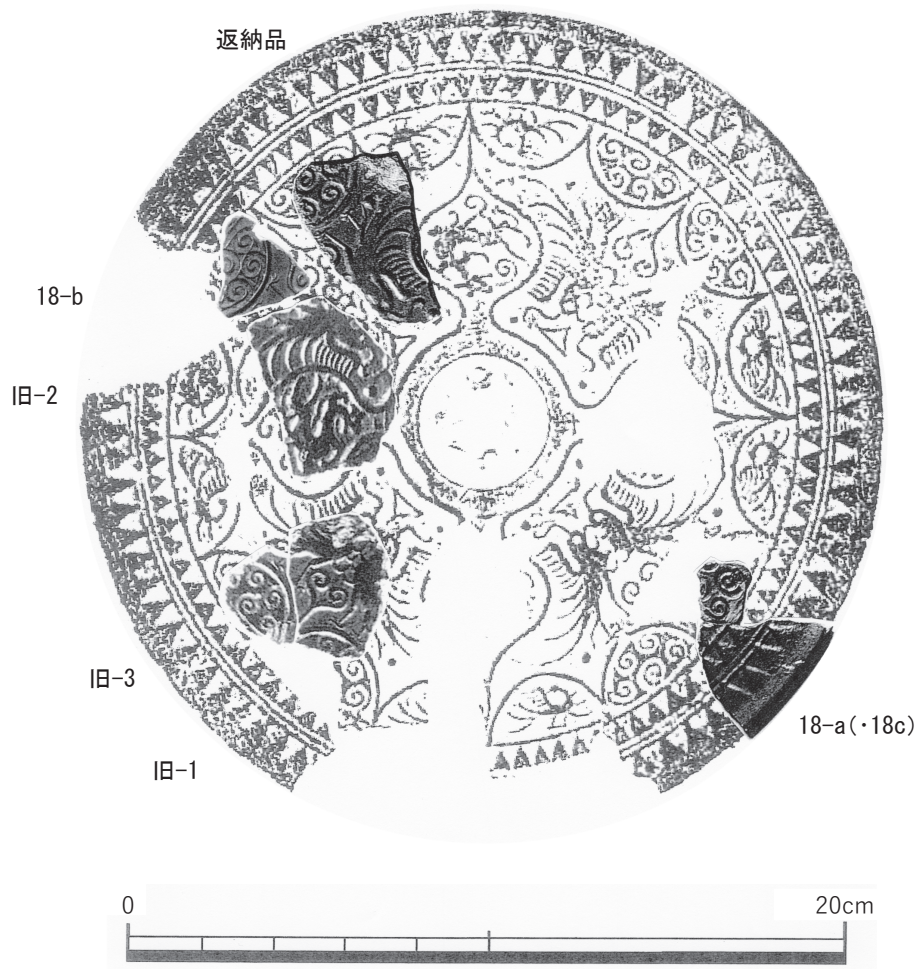


図5 関連資料の復元案（縮尺任意）
背景は尾ノ上古墳出土鏡



図6 中国出土の関連資料（縮尺任意）
 1：浙江省金華古方25号墓出土鏡（復元径15.2cm）
 2：江西省東湖区永外正街1号墓出土鏡（面径12.0cm）

いるが、多くの先行研究の中で類似した資料として挙げられている2面についてあらためて確認しておきたい。浙江省・金華古方25号墓出土鏡は、秋山氏分類の4C式に該当し、復元径15.2cmで外区に鋸歯文を有する（図6-1:金華地区文管会1984）。江西省・東湖区永外正街1号墓出土鏡は復元径12cmで（図6-2:江西省博物館1974）、秋山氏は単鳳鏡として分類するが、宝珠系の中に龍文などを描く点などが沖ノ島鏡群と共通する。これらはいずれも西晋墓から出土したものとされることから、17-1鏡・18-5-3鏡や尾ノ上鏡についても、上述の岡内氏や岡村氏が指摘するように、三国代以降の西晋代に定点を置くことができるものとする。

その上で、今回尾ノ上鏡と沖ノ島18-5-3鏡が同型技法による同一文様鏡と想定されたことの意義について考えておきたい。尾ノ上古墳は、円筒・壺形・朝顔形埴輪を伴っており、後世の攪乱により堅穴式石槨が大きく破壊されていたが、鏡以外に石製・ガラス製の玉類が出土している。玉類の組成からは前期後半の可能性が指摘されている（谷澤2020）。上記のような三国鏡においては、同型技法による同一文様鏡の存在は一般的であるが、今回18-5-3鏡と尾ノ上鏡が同一文様鏡であることが判明したことにより、これらの鏡が古墳時代前期に列島に流入したも

のであること、17-1鏡もその一部である可能性が高いことが確認された。18-5-3鏡と尾ノ上鏡は、同一文様鏡ではあるものの、古墳時代中・後期の同型鏡群の一部などではなく、西晋鏡として4世紀代以前に列島に流入したものであることが確定した点は大きい。古墳時代前期に近畿地域に流入した少なくとも3面の八鳳鏡のうち、2面は沖ノ島に、1面は尾ノ上古墳を築造した地域集団のもとにもたらされたと考えることができる。

また本鏡群（17-1鏡・18-5-3鏡・尾ノ上鏡）が江南地域に類例がみられる西晋鏡であると考えた場合、これらは3世紀後葉～末前後において行われた、近畿中枢による西晋王朝への遣使の結果として列島にもたらされた鏡であると理解することができる。列島の古墳時代遺跡出土鏡の中に、三国西晋鏡の存在はこれまでも多く知られているが（車崎編2002）、本鏡群は、三角縁神獣鏡とは別の形で3世紀後半代における西晋王朝とのつながりを想定することが可能な資料としても重要である。他の列島出土西晋鏡についても、同様の観点での検討が必要であろう。

5. 結語

以上、返納品の鏡と関連資料について検討を行った。結果は以下のようにまとめることができる。

- ・返納鏡片・18号遺跡出土鏡片・伝宮地嶽付近出土鏡片（鈴木基親氏旧蔵）は、いずれも18号遺跡出土の同一個体で本来一面分の可能性が高い
- ・上記復元鏡は、広島県尾ノ上古墳出土鏡の同型技法による同一文様鏡と想定される
- ・上記復元鏡は、沖ノ島17号遺跡出土八鳳鏡（変形雙鳳鏡）とは、ほぼ同大・同一型式ではあるものの、同範・同型関係にはない
- ・上記復元鏡が尾ノ上古墳出土鏡と同一文様鏡であることから、沖ノ島17号遺跡および18号遺跡から出土した八鳳鏡は、古墳時代前期に列島に流入したものである可能性が高い

尾ノ上古墳出土鏡の調査および写真の掲載に際しては、福山市文化観光振興部文化振興課の関係各位に大変お世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 秋山進午 1998 「雙鳳鏡について」『考古学雑誌』84-1
- 岩本崇 2023 「鏡からみた沖ノ島祭祀の展開」『沖ノ島研究』9
- 梅原末治 1966 「福岡県下出土の雙鳳鏡片」『九州考古学』28
- 王仲殊（西嶋定生監修・尾形勇・杉本憲司編訳）1998 『三角縁神獣鏡』学生社
- 岡内三眞 1996 「双鳳八爵文鏡」『東北アジアの考古学第二 [権域]』キブンセム
- 岡崎敬 1979 「鏡」宗像大社復興期成会『宗像沖ノ島』
- 岡村秀典 1996 「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」『考古学と実年代』第1分冊、埋蔵文化財研究会
- 金華地区文管会 1984 「浙江金華古方六朝墓」『考古』1984-9
- 車崎正彦編 2002 『考古資料大観 5 弥生・古墳時代 鏡』小学館
- 江西省博物館 1974 「江西南昌晋墓」『考古』1974-6

- 重住真貴子・水野敏典・森下章司 2010 「沖ノ島出土鏡の再検討」水野敏典編『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』奈良県立橿原考古学研究所
- 下垣仁志 2018 「沖ノ島の鏡」『季刊考古学別冊27 世界のなかの沖ノ島』雄山閣
- 谷澤亜里 2020 『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- 辻田淳一郎 2007 『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 辻田淳一郎 2025 「九州の古墳時代遺跡出土鏡をめぐる諸問題」『九州島の古墳時代における銅鏡の様相』九州前方後円墳研究会
- 花田勝広 1999 「沖ノ島祭祀と在地首長の動向」『古代学研究』148
- 原田大六 1961 「17号遺跡の遺物」宗像大社復興期成会『続沖ノ島』
- 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
- 福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団 2000 『尾ノ上古墳』福山市埋蔵文化財発掘調査団調査報告書第13集
- 宗像大社復興期成会 1979 『宗像沖ノ島』

挿図出典

図1：梅原（1966）・宗像大社復興期成会（1979）の写真を変更、返納鏡片は筆者撮影。図2：写真は筆者撮影、拓本・実測図は原田（1961）を変更。図3：写真は筆者撮影、拓本・実測図は福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団（2000）を変更。図4：筆者撮影。図5：福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団（2000）の拓本と図1の写真をもとに筆者作成。図6-1：金華地区文管会（1984）、図6-2：江西省博物館（1974）を変更。

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

沖ノ島研究 第12号

令和8(2026)年7月発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県市町村・地域振興部文化局九博・世界遺産・文化施設課)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号

ISBN 978-4-9913533-5-2